

『幼い頃からが大事』

最近の報道で気になることがありました。家族連れで走行していた車に対して腹を立てた25歳の運転者が、高速道路の追い越し車線で車を無理やり停止させ、因縁をつけている最中にトラックが追突してきて、車を停止させられた夫婦が死亡してしまったというニュースです。この加害者は、自らの非を注意されてにもかかわらず、キレてしまってその後、どれほど危険な行為だったかの判断もつかずに感情まかせの行動をとってしまったということです。これと似たような危険運転をするドライバーが増えているという報道もされていました。カッとなったりキレてしまったりすると自分の感情を制御できずに他人に迷惑をかけてしまうという事件の多さに驚かされます。

なぜこのような人間がふえてきているのか。ストレス社会と言われる現代です。仕事のこと、人間関係など様々な要因が複雑に絡み合っているのですが、そういう人間がどう育ってきたのかについて、つい考えてしまいます。

必ずしも成長の過程の中だけに原因があるとも言えないでしょうが、今、幼児期の成長が大人になってからのその人間の人格形成を大きく左右するということが改めて見直されてきています。

幼児教育は、主に1歳から6歳までの未就学児に対して行う教育で学習や運動・芸能などの分野を幼少期より徹底して教育する英才教育と異なり、よりよい人間形成の土台を築くための総合的な教育を幼児期に施すことを指します。

幼児期に最も大切なのは人間形成に必要な心の教育・情操教育を中心としたバランスのとれた教育です。知育ばかりに囚われた偏った教育では、基礎となる土台がしっかりとせず、不安定な状態に育っていくことになりかねません。いくら知能が高くても、勉強ができて、人を思いやる心・気持ちがなければ、社会不適應となる心配が出てきますし、自立性や自律性・社会性が育たなければ、どんな能力も活用できなくなります。

人としてのやさしさ・思いやりがある心は、よい環境や適切な教育によって育ちます。過干渉・過保護、または反対に過放任の家庭が増えていると言われていますが、そのような環境ではやさしさ・思いやりの他、自立性や自律性なども育ちにくいと言えます。

幼児期のしつけも欠かすことができない重要なものです。しつけは道德教育の基礎とも言えますし、しつけは教育の根底を支える大変重要なものです。しつけは学校や幼稚園な

どで教育されるものではありません。赤ちゃんや幼児ではまずやってよいことと悪いことを教え、区別させるところからはじめ、朝の挨拶、食事前後の挨拶、就寝前の挨拶、人と会った時の挨拶を教えます。生活全般での礼儀を教えることで、人としてのマナーを身に付けられるように教育することが必要です。

礼儀を軽視する現代社会では、しつけに対して積極的ではなく、放任に近い子育てをしている家庭もよくみかけます。そのような家庭では、子どもたちも礼儀を学んでいないため他人に迷惑をかけていることや悪いことをしているなどお構いなしの行動を平気でとります。つまりなにもわからないまま育つのです。

しつけを教育されていないと概ね次のようなことになりかねません。

- ① 物事のよい・悪いの基準が難しくなり、人に迷惑をかけます。
- ② 見た目に粗暴な行動をとります。
- ③ 他人の気持ちを考えられず、嫌われてしまいます。
- ④ 周りとのトラブルが絶えず、親子ともに困ります。
- ⑤ 我慢する力が育ちにくく、キレやすくなります。
- ⑥ じっとしていられなくなります。
- ⑦ 衝動的な行動に走りやすくなります。
- ⑧ 無計画に行動します。

などなど

しつけと聞くと、強制的で子どもに圧をおしつけるというようなイメージがある方もいますが、けっして厳しさだけを前面に出すということではないのです。

叱りつけて何かをさせるということではなく、先にも述べたように教えるところはしっかりと教え、身に付けさせるということで、子どもが安心して教えるを受けることが大切です。そのためには、幼い頃からの言葉のやりとりがとても重要になります。人の言葉を聞いて徐々にその真意を、そして相手の思いを汲むことができるようにすることが大切です。また、子どもが何を言おうとしているのかをしっかりと受け止めてあげることも忘れてはなりません。大人しいからといって、ゲームやテレビなど画面に集中する時間が家庭生活の時間帯で大半を占めるということには注意が必要です。